

漢文的スタイルから漢字仮名交じり文へ

——曾我物語の場合——

田 島 優

はじめに

曾我物語は真名本系と仮名本系の二系統に大別され研究されている場合が多い。かつては、真名本・大石寺本・仮名本の三類に分類されていた。しかし、大石本が真名本から唱導的章句や説話などを省略し、それを読み下し和文化したものであることから、成立論を重視する立場からは梗概本ということで大石寺本は問題とされなくなった。

ただし、最近でも大石寺本系統の諸本の分類ならびに相互関係について論が展開されている。まず大石寺本という呼称に問題があることから、この一類を訓読本と称するのが良いとされている。^(注1)

現存している真名本は、妙本寺本と、本門寺本およびその転写本の本門寺本諸本とに分かれる。しかし、本門寺自体が妙本寺本を転写したものであることから、究極的には妙本寺本に遡ることになる。^(注2)一方訓読本系統の諸本は、本門寺系の真名本を読み下したものとされている。訓読本系統は、さらにⅠ類とⅡ類の二つのグループに分類されるとい^(注3)う。そして真名本とⅠ類との関係、Ⅰ類とⅡ類との関係について次のような考察が行われている。^(注4)訓読本については、妙本寺本・本門寺本との用字法の異なりや本文の訂正などから、本門寺系の第三の真名本を訓読した可能性が高いとする。また訓読本系Ⅰ類とⅡ類との関係から、現存のⅠ類本と、Ⅱ類本の祖本にあたる第三のⅠ類本があつて、それらに共通する上位の第三の真名本は、現存の真名本から真名表記のまま記述を〈削除〉した抄本的なものである可能性がある^(注5)と推測している。

訓読本の諸本の系統に関してこのような研究が行われているが、本稿では作品の内容の関係ではなく、表記スタイル史の観点から、真名本から訓読本への展開において、どのような改変が行われたのかを論じてみたい。

一 真名本を訓読本にした際の変改（先行研究）

真名本から訓読本への過程については、岩波日本古典文学大系の『曾我物語』の解説において、訓読本I類の日本大学蔵本について、「全体に大石寺本と同じような本文をもちながら、一部に箱根別当の説法のことばなど、それに欠けた記事をも含んでいる。そのような日本本の研究によって、真字本から仮名交じり文となる過程が、いつそうあきらかになるものと期待される^(注4)」と記している。

これを代表として、先行研究では多くのものが省略に注目して、そこから作品の性格の変更に^(注5)ついて論じている。訓読本の省略の仕方については、夙に山岸徳平氏が「経文の引用や、物語に縁遠いか、又は不用と見た部分を省略した^(注6)」ものと指摘している。そして村上學氏は、その省略を「真字本にあつた特異な性格を薄めようとする傾向があり、特殊な表記を通行のものに正す傾向がある。」と指摘している。その際に本門寺本以外の「真名本や仮名本を参照した痕跡は、一見の範囲では認められなかった^(注6)」と述べている。村上氏の言う真名本にあつた特異な性格とは、表記の特異さ以外にどのようなものがあるのだろうか。

また新日本古典文学全集本『曾我物語』の解説では、真名本から訓読本との関係について、ほとんどの場合は山岸氏のように考えて間違いないとしながらも、詳細に見ると、次の四種類を認めなければならないとする^(注7)。

- ① 真名本の冗長な記述を一定量まとめて〈削除〉する方法
- ② 真名本の冗長な記述を簡潔に〈縮約〉する方法
- ③ 読みやすくなるよう真名本の章句の順序を入れ替えて〈整序〉する方法
- ④ 真名本の不適切な表現を削って代りに異文と〈差し替え〉る方法

①と②が山岸氏の「省略」に該当する。③は文としてのまとまりを、④は内容の訂正となろう。そして、この本によれば、①の《削除》したところは百か所余り、②の《縮約》したところは一五か所であり、そして③の《整序》したところは二一か所、④の別の表現に《差し替え》たところは六か所であるという。また、これらの方法の組み合わせもあるという。

それぞれの簡数が明記されているが、それがどの箇所であるのか不明である。ここで扱われているいずれのものも、漢文（真名本）と漢字仮名交じり文との表記スタイルの違いによつて生じたものとはいえない。ここで扱っていく表記スタイルに関わる点はもっと細かいことになろう。

二 真名本曾我物語について

先に述べたように、現存している真名本は、妙本寺本と、本門寺本およびその転写本の本門寺本諸本とに分かれるが、本門寺本自体が妙本寺本を転写したものであることから、究極的には妙本寺本に遡ることになる。妙本寺本は真名本であるにもかかわらずヲコト点だけではなく送り仮名や振り仮名（訓み仮名）まで施されている。尊敬語の「給ふ」も送り仮名として付されている。日本語においては尊敬表現は重要であるが、漢文では文中に記さないのが一般的であるので、送り仮名として付すしかないのである。真名本に用いられたあて字やヲコト点、送り仮名の付け方から見ると、漢文で書かれたものを後に訓読したものではないと思われる。村上氏が、「乎古止点と付仮名を作成当時から伴っていたのではないかと思われる。」と述べていることは正しいであろう。執筆時に、読み仮名やヲコト点、送り仮名を施してまで漢文のスタイルで書くというこだわりは何だったのであろう。あて字や表記スタイルの関係で、四部合戦状本平家物語や神道集との関係が論じられているが、これについては後で触れたい。

妙本寺本は漢文的なスタイルで書かれているが、日本語的語順になっている箇所が多い。いわゆる変体漢文というものである。真名本曾我物語では、真名本であるにもかかわらず、多くの会話を含んでおり、それも話しことば的に表

現しようと努めているので、日本語的な語順が出現しやすいのであろう。

又下人共に物モ不レシテ食ハ(セ)歸ラむ時に

(又)下人共に物モ食ハ(セ)不シテ歸らむ時に

耶殿、有^二つる^一傾城共^二の、罪作^一(リ)に女に手はシ不レナト懸下

(耶殿、傾城共の有つる^一、罪作^一(リ)に女に手はシ懸給不^ト)

先に述べたように、妙本寺本を転写したのが本門寺本であるが、その転写の作業には苦勞したようである。妙本寺本は、日助が天文十五(一五四六)年四月二十五日に書き始め(巻第一)、同年八月十五日(巻第十)に書写が完了したというから、約四ヶ月で写し終えたことがわかる。一方本門寺本は、日義が天文二十三(一五五四)年に筆写したものであるが、その転写に八ヶ月近くもかかっている。妙本寺本にはヲコト点の他に送り仮名や振り仮名まで施してあったが、それでも読みづらかったのであろう。

転写された本門寺本では、反読を表すレ点や一二点が付けられており、さらにヲコト点の大半が翻字され、朱点のヲコト点と併記されている。また多くの読み仮名が施されており、そしてイ文や傍書を本文に直している。このような追加的作業によって、妙本寺本の書写よりかなりの時間を要したのであろう。しかし、その作業の御蔭で、訓読本の作成が可能になったのである。新日本古典文学全集中『曾我物語』では、訓読本の基になった第三の真名本を想定しているが、そこに記されているように、それはやはり本門寺本の系統でなければ訓読は無理であらう。

漢文に施されているヲコト点は、孤立語の漢文を膠着語の日本語で訓読する際に必要な付属語である助詞や助動詞を記号化したものである。その記号とは、漢字を四角に見立てて、決められた位置に決められた点を施すことによってある語(ある音)が示されるものであり、あくまでも本文を訓むための点である。ただし一つの記号が一つの付属語だけを示すとは限らない。「ハ」を示すヲコト点は、文脈によって係助詞の「は」であつたり接続助詞の「ば」であつたりする。

しかし真名本曾我物語のヲコト点はそれとは異なる点がある。この本の場合は、先に日本語の文章があつて、その文

(173)

(167)^(注10)

章をヲコト点を利用しながら書き記したものと考えられる。漢文を訓むためのヲコト点を書くために無理に利用しているのである。したがって、自立語の活用語尾や助詞などで、その音がヲコト点で示される音と重なれば、そのヲコト点が生用される。例えば、「ス」のヲコト点は打消の助動詞「ず」の他に助動詞「むず」の「ず」、サ行動詞の終止形「す」であつたり、様々に利用されている。「ハ」のヲコト点は先に挙げた係助詞の「は」や接続助詞の「ば」以外に、八行動詞の未然形活用語尾としても利用されている。また中世に使用された強調の複合助詞「ばし」の場合、「ば」にヲコト点の「ハ」が使用され、シが送り仮名として付されるようなことが生じている。このように妙本寺では送り仮名を施すことを前提としているので、過去の助動詞「き」の已然形＋接続助詞「ば」の「しかば」の場合、送り仮名「シ」とヲコト点「カ」と「ハ」のような、送り仮名とヲコト点とを組み合わせた例が多く見られる。真名本曾我物語では、このように文章を書くためにヲコト点を使用しているため、一つの漢字に対して多数のヲコト点が生ずることもあり、その使用法も訓むためのヲコト点とは異なり複雑である。意味の通る文章として、ヲコト点や送り仮名がどのように組み合わされているかを読み解くのに、妙本寺本を転写し本門寺本を作成した日義にとって苦勞の多い作業であつたであろう。

ところで、真名本が曾我物語がなぜ漢文的スタイルをとりながらヲコト点や振り仮名を施したのであろうか。また日本語的な語順になつてゐる箇所が多いために、反読の法則性が見出せない。このような漢文的スタイルは四部合戦状本平家物語のスタイルと似ている。ただし四部合戦状本平家物語の場合は、その周辺に漢字仮名交じり文の平家物語があり、反読のレ点や一二点、また送り仮名や振り仮名が施されていなくても、それらを参照すれば訓むことが可能である。真名本曾我物語に使用されているあて字は、中世古辞書に見られない特殊なものであるが、四部合戦状本平家物語や神道集の漢字表記と共通している。そして本門寺本に付されているそのあて字に対する振り仮名は四部合戦状本や神道集と矛盾していないという。また神道集と同一の内容を持つてゐる。これらのことは、真名本本曾我物語が、四部合戦状本平家物語や神道集と同一の文化圏でほぼ同時期に作成されたことを示すものであろう。神道集の成立は文和三（一三五四）年から延文三（一三五八）年頃とされる。^{（金田）}

三 漢字仮名交じり文の表記スタイルへ

第一節で述べたように、真名本から訓読本への変改について、先行研究では内容の簡略化や文章の装飾的な観点から論じられていた。ここでは、主に漢文と漢字片仮名交じり文との構造の違いなどの観点から眺めていく。本稿では、曾我物語の中心的な場面と思われる仇討ちの場面が記載されている巻第九を対象として、そこに見られる変更点を見ていきたい。

本来ならば訓読本の元となった本門寺本を利用すべきであるが、内閣文庫本の影印をまだ入手できていないので、本稿では妙本寺本を用いての対照となる。妙本寺本は山岸徳平氏・中田祝夫氏解題『真名本曾我物語』（一九七四年 勉誠社）の影印、並びに翻字にあたっては角川源義氏による『妙本寺本曾我物語』（一九六九年 角川書店）や青木晃氏他編『真名本曾我物語1』（一九八七年 平凡社）と笹川祥生氏他編『真名本曾我物語2』（一九八八年 平凡社）を参考にした。

また訓読本は日本大学本を翻字した新日本古典文学全集、梶原正昭他校注・訳『曾我物語』（二〇〇二年 小学館）を利用した。この本は、一般読者向けに底本の漢字片仮名交じり文を漢字平仮名交じり文に改め、さらに文中に使用されている漢文的な語序を日本語的語序で訓読している。また誤りやあて字と思われる箇所を読みやすい漢字表記に直してあり、本来の姿が見られないが、本稿では取り敢えずそのまま利用していく。そして訓読本との違いを明確にするために、妙本寺を訓読した形で示す。訓読本において省略した箇所を扱う場合には、その省略がわかりやすいように、日大本を先に掲げることとする。

以下、漢文的特徴を日本語文的に改めた点について挙げていく。

(1) 指示詞（目的語・補語）の省略

ア 日大本 「いかに、殿ばら。何の用におはしたるぞ」と問はれければ、十郎聞きて
妙本寺 「何かに候、殿原。何の用に御はしたるぞ」と問はれければ、十郎之を聞て

(167) 291
292

イ 日大本 「義盛侍はずとも、四郎左衛門と朝比奈が候へば、静かに召せ」とて

妙本寺 「義盛これに候はずとも、四郎左衛門と朝夷が候へば、義盛がありと思し食せ」とて

(167~168) (292)

漢文では積極的に指示詞を示そうとしている。一方、訓読文では文章として冗長となるため省略したものと思われる。

(2) 主語の省略

日大本 畠山殿、「御料はいかに候ふ」と宣ひければ、十郎、「和田殿の御許にて不足無なく饗応され奉りて候」とありければ、「まづ此方へは御入り候はで」とて、「さらば、糴を参らせよ」とて出されける。

(294)

妙本寺 畠山殿、「御料は何かに候、殿原」と言へば、十郎聞きも敢へ給はず、「和田殿の御許にて不足なく賞され奉り候」と申しければ、畠山殿、「取り敢へず先づ是へは御入り候はず」とて、「而は干飯を洗て勸め奉れ」とて、干飯を洗て出されけり。

(168)

日本語文では述語によって主語がわかることが多く、主語を示さないことが多い。またこの場面のように、二人の間答であれば、会話が順繰りに行われるため一々表示する必要もない。これは次の(3)とも関係していよう。

(3) 繰り返し表現の省略

日大本 (主語の省略) 「まづ重忠、鬼飲み仕らん」とて三度召して、十郎にさされける。十郎も三度飲みてぞ置きにける。畠山殿、また新盃を召して、五郎にささる。五郎三度飲みて、畠山六郎にさす。六郎飲みて、十郎にさす。

(294)

妙本寺 畠山殿、「先づ重忠鬼吞仕らむ」とて、先づ三度食して後十郎に差さ被けり。十郎三度吞てぞ置きたりける。

畠山殿酒杯を取り寄せ三度食して後、亦五郎に差さ被けり。五郎三度吞て後畠山六郎に差す。六郎三度吞て後五郎に差す。五郎三度吞て後六郎に差す。六郎三度吞て後十郎に差す。十郎三度吞てぞ置たりける。

(168~169)

妙本寺本の最後のあたりは重複であろうが、「後」「三度」という語が繰り返し出現するので省略したものと思われる。他の箇所において同様な省略が行われている。

(4) 通用文字への変更

村上学氏が真名本から漢字仮名交じり文への変更について「真名本にあった特異な性格を薄めようとする傾向があり、特殊な表記を通用のものに正」していると述べている。新日本古典文学全集中では漢字表記は底本のままではなく、例えば「不便」を「不憫」のように現代風の漢字表記に改めており、底本の表記を知ることができない。したがって、どのように正しているのか不明であるが、村上学氏の意見を参考して漢字表記の変更も漢字仮名交じり文にした際の変更として認めておきたい。

以上、(1) (2) (3)は、妙本寺本が漢文的なスタイルを採用したために、そのスタイルに合わせた表現形式を用いていたであろう。それが訓読本では日本語の文章としてはその必要性を感じず省略したのである。 (4)は表記の問題であるが、妙本寺本のアて字が四部合戦状本平家物語や神道集などの真名本のアて字と一致していることは、その当時の真名本での一つの形式であつたのであろう。漢字片仮名交じり文にする際に、漢字表記を改めたのはそこからの脱却ともいえよう。

次の(5)は新日本古典文学全集中の言う訓読本化の②の縮約に近いものである。ただし、新日本古典文学全集中では①の削除が二百か所あまり、それに対し②の縮約した箇所は十五か所と述べているので、次に示すような修飾的成分が多くの箇所で省略されているものは②の縮約に入らないのであろう。

(5) 修飾的成分などの省略

日大本 十郎が文には、「畏まつて申し候。御前の女房たち、申して賜ひ候へ。五郎と某は、五つや三つの年より孤児となりて、母御前一人を頼み奉りて年月を送りしことの悲しさに、仏神に祈り申して、「敵祐経に逢はせ給へ」と祈念せし験にや、今夜、本意を遂げんする」との事の葉、大磯の虎に最後を誂へしことまで細々と書き続けて、「膚の守をば母御前へ奉る。着馴れて候へども、膚の小袖をば讃岐の御局へ進らする。鬢の髪しるしの候、一把をば二宮の姉御前へ、一把をば三浦の伯母御前へ、一把は早川の伯母御前へ進らせ候。中にも、讃岐の御局には乳房を含められ奉り、養育の御厚恩をば報じ奉らず、あまつさへ歎かせ奉らんことこそ心に

懸りて覚え候へ。生命こそ替り候ふとも、魄は叢の蔭にても守護神となり奉るべき候へ。馬・鞍をば曾我殿へ進らせ候ふ」と書きて (295 ~ 296)

妙本寺

十郎が文に書きけるは、「畏て申し候。御前の女房達申して賜ひ候へ。五郎と助成は生年五つや三つの年自りは孤児みなしこに成て母御前一人を憑たのみ進まゐせつつ年月を送りし事の悲しさに、仏神三宝に祈り白して敵助経に合せ給へと祈念せし故にや、鎌倉殿狩庭廻りの候ひしかば、上野下野に至るまでは付き奉りしかども叶はず。是まで付き廻りつつ、今夜本意を遂げんずる言の葉、大磯の虎に最後を誂へし事も只推し量らせ給ふ可く候。物の数には候は不ねども膚の守りをばは母御前へ進する。着馴らしてこそ候へども膚の小袖をば乳母の讃岐の御局へ奉る。鬢の髪かみの候ふ一把をば二宮の姉御前へ進せ候。一把をば三浦の伯母御前へ進せ候。一把をば早河の伯母御前へ進せ候。中にも讃岐の御局には、助成幼少竹馬の頃より乳房を含ませ被れ奉りて、その高恩くさひをば報すぜ不ずして先立ちつつ、歎かせ奉らむ事こそ返す返すも心に懸て候へ。縦ひ生命こそ替り候とも叢魂くさむろの影にて守護と成り奉る可し。馬鞍をば曾我殿へ進せ候」と、委しく書き留めて (169)

真名本から訓読本に至る過程において様々な刈り込みが行われている。その刈り込みは真名本を日本語文としての漢字片仮名交じり文に変換するにあたっての必要性に生じたものもあるうし、単に余分な表現や内容を省略したものもあるう。

四 「候」と助動詞の「可」・「不」との相互承接をめぐって

四、一 助動詞の承接の違いについて

真名本と訓読本とを読み合わせていくと、助動詞の承接に異なりが見られるものがある。これらが訓読本という漢字片仮名交じり文というスタイルにすることによって生じた改変なのかを考えて見たい。

四、二 可能の助動詞「可（べし）」と「候」との承接について

真名本曾我物語は先に述べたように真名本でありながら会話文が多い。そのため、打消の助動詞「ず」と可能の助動詞「べし」との承接順序が、訓読的な「べからず」ではなく、和文的な「ざるべし」となっている箇所がある。

而とも渡^{され}レセ下は世タにも何とか可^レ不^レ二思知^一 七下は、

(而ども世だにも渡らせ給はば、何ぞか思知らせ給は^さ不^べ可^し)

漢文では「不可」であり、「可不」という語序になることはない。したがって、漢文訓読文では反読のルールを守り「べからず」と読まざるを得ないのである。しかし真名本曾我物語では、話しことばに忠実であろうとして、漢文の規則に従わず、このように記したのである。

中世の会話文においては丁寧な文末表現である「候」の使用が特徴的である。「候」と「可（べし）」との承接順序において、真名本と訓読本との間に相違が見られることがある。

a 妙本寺 尚^を自^二曾我^一賜^よ候^{むす}レは、明日^ふ必^ず可^二ソ出来^一候^ふ答^へける

(尚を曾我自り賜り候むずれば、明日必ず出来候ふ可しとぞ答へける)

日大本 なほ、曾我より賜り候はんずれば、明日は必ず出で来たるべく候ふとぞ答へける。

b 妙本寺 中々且^しモ被^レ宥^{なだ}候^{はむ}事^{コソ}存^二深恨^一可^レケレ候^ふ

(中々且くも宥められ候はぬ事こそ深き恨と存じ候ふ可けれ。)

日大本 なかなか、しばしも宥められ候ひなんことこそ、深き恨みとも存ずべく候ふ

妙本寺本において、aの文章では「可」に「とソ」とヲコト点と送り仮名が施されており、bの文章でも「可」に「ケレ」が送り仮名が付されており、コソの結びとなっていることから、「可」が文末であることが確認できる。

一方、日大本では「候」で文章が終わっている。このような「候」の特徴は、矢田勉^{（注12）}氏の定義する「候文」、すなわち近世の公文書・私文書および一般の書状に専一に用いられる文体の特徴と一致する。候文では原則として「候」で終わり、「候」の下にさらに助動詞や補助動詞が接続する用法が存在しない。訓読本である日大本では、次の「四、三」

で見るようにそこまでは徹底されていないが、真名本である妙本寺と比較すると、「候」で終わる場合が増え、また「候」と助動詞との共存を避けている場合も見受けられる。

四、三 打消の助動詞「不(ず)」と「候」との承接について

妙本寺本と日大本との間で承接順序に相違が認められるのは、「可(べし)」の他に打消表現「不(ず)」と「候」とが承接している場合である。

c 妙本寺 敵の助経を一目自^二見候^一以来、片時^モ被^レ忘^二父の御事^一か不^レシかは候^ハは^{ざり}

(170)

(敵の助経を一目見候ひしより以来、片時も父の御事が忘れられず候ひしかば)

日大本 敵祐経を一目見候ひしより以来、片時も父の御事が忘れられず候ひしかば

(297)

妙本寺本では「忘れられ候はざり」「(「候」+「ず」)のように「候」に打消の助動詞「ず」が下接しているのに対して、日大本では「忘れられず候」「(「候」+「ず」)のように打消の助動詞「ず」に「候」が下接している。ただし、「候」の下に過去の助動詞「き」が下接しているので、候文のように「候」で終止するところまでには至っていない。

妙本寺本での「不候」のような連続した書き方からは、日大本のような「忘れられず候」のような訓み方はできない。妙本寺本の「不」の位置は漢文の形式からすれば奇妙である。丁寧表現の補助動詞の「候」を漢文で使用するこ自体中国の漢文には合わないものであるが、このような一字の倒置は変体漢文の特徴であり、さらに遡れば『今昔物語集』などにおいて既に行われていることである。漢字片仮名交じり文においても漢文的な倒置が踏襲されており、日大本でも「可く」「被く」「く不及」などが使用されているという。

真名本曾我物語では、「候」が補助動詞である場合、「不」の位置がこの例のように「候」の直前に置かれている場合と、動詞の前に置かれ「不」と「候」とで動詞を挟む形になっている場合とがある。前者の例としては、次のようなものがある。

d 妙本寺 蒙^ニマては御恩^一を、思寄不^レ候、奉^レ見不^レコソ候^レは処^カ恨^モ候^ハは^メ

(171)

(御恩を蒙るまでは思ひ寄り候は不^ず、見奉る処が候は不^ればこそ恨も候はめ)

日大本 御恩を蒙らんとと思ひも寄り候はず。見奉るところがあらばこそ、恨みも候はめ。

e 妙本寺 五郎承^レて之^を、及^レ仰^{にも}不^レ候^は。

(五郎之を承て、仰せにも及び候は不^ず。)

日大本 五郎承り、「仰せにも及び候はず。

d、eの例からわかるように、「不候」と連続して書くことによつて、「候はず」と訓むことが意図されている。語順に従つて訳すならば、「くではございせん」とでもなるのであらう。なおeで始まる会話文には、g、b、i(出現順)を含んでおり、「候」の承接に関しては注意を要する箇所である。

一方、動詞を挟んで上に「不」、下に「候」が置かれている例として、次のようなものがある。

f 妙本寺 此殿^をは五六の比^マて成長進^シて候^シかは不^レ忘^二日来の情^一を^モ候

(此の殿をば五つ六つの比まで成長進せて候ひしかば、日来の情をも忘れ不^ず候。)

日大本 この殿、五つ、六つの頃まで育ち合ひ参らせて候へば、日来の情も忘れず候に

g 妙本寺 一寸の首^を被^レ召^二千段^一候^{とも}全不^二マシク^一恨存^一候^{なりと}申^{ケル}

(一寸の首を千段に召され候ふとも、全く恨とも存ず(不)まじく候なり」とぞ申しける。)

日大本 全く恨みとも存ずまじく候ふなり」とぞ申しける。

h 妙本寺 一日片時^モ在^レて世に見^ムとは不^レ存^セ候^{シと}申^{ケル}

(一日片時も世に在らせて見むとは存ぜ不^ず候ひし」とぞ申しける。

日大本 一日片時も世にあらせて見んとは存ぜず候ひし」とぞ申しける。

f、g、hの例では、動詞を打消して、それに丁寧の「候」を付加している。語順に従えば「くないのでございませ」とでも訳すのであらう。しかし、訳からは「不+候」と「不+動詞+候」との違いは明確ではない。話しことばにおいて丁寧の意を次第に文末で表すようになり、その結果候文のような「候」で終わる文章が成立するようになったの

であろう。

ここまで見てくると、妙本寺本では打消の助動詞「不(ず)」と丁寧の補助動詞「候」との承接の仕方には二通りが見られ、「候はず」の場合は「不+候」という形式で書かれ、一方「くず候」の場合は「不+動詞+候」の形で記されている。

その規則を破っているように見られる例がある。gとhと同じく動詞「存ず」を挟む形でありながら、「候はず」のように候を打消す形になっている例iがある。

i 妙本寺 少モ不下存_二心苦_一は候_上ハヌなり (185)

(少しも心苦しくは存じ候はぬ(不)なり。)

日大本 少しも心苦しくは存じ候はぬなり。 (329)

角川源義氏の『妙本寺本曾我物語』では一二点を施しているが、妙本寺本では「候」の送り仮名として「不」の「ぬ」まで送っており、「不」が打消を示す役割だけであり、不読となっているが、妙本寺本では確かに「候」の下に反読の点が施されている。このような「不」が打消だけのマーカーとしての機能は今昔物語集の宣命書きに見られるところである。

ここまでは、妙本寺本と日大本との相違を見てきた。巻九ではなく巻六の例であるが、妙本寺本と本門寺本との間で訓みが異なっている場合が見受けられる。新日本古典文学全集『曾我物語』390頁からの引用になる。原表記「不閑候」に対して、

j 妙本寺 閑_{しづ}り候はざらむ (118)

本門寺 閑まらず候ふべき

この例も、先の妙本寺の読み方からすると、本門寺での訓みが正しいことになる。妙本寺本の訓みと日大本の訓みとの違いが本門寺本に由来している場合も考えられ、本門寺本での確認が必要となろう。

「候」と打消の助動詞「ず」との承接関係には二通り見られたが、「候はず」のような打消「不(ず)」に先行する場合

合は、敬語の補助動詞と同じ承接順序である。「候」は「侍り」にとつて代わつた丁寧の補助動詞であるが、「侍り」の場合「不(ず)」は下接していた。「候」の後に「ず」が下接するのが本来の形であつたのであるが、候文を典型とするような文末表現になりつつあつたのであらう。妙本寺本と比較して日大本に「ず」に「候」が下接する用例が増えてきたのは、漢文的スタイルから漢字片仮名交じり文への単なるスタイルの変更に伴うものではなく、そこには「候」の機能の変化という時代的な特徴が関与していると思われる。

四、四 「不」と「候」との承接の排除

妙本寺本で「不」と「候」とが承接しているにもかかわらず、訓読本である日大本では「候」の使用を嫌っているように見受けられる場合が多く見られる。

k 妙本寺 口惜被召^{クモシ}三具^セ御友^ニ不^レヌ候^ハ者哉

(口惜しくも御友には召し具せられ候はぬ(不)ものかな。)

日大本

口惜しうも御供に召し具せられざるものかな

l 妙本寺

善惡被^セ三召^セ三具^セ後世路の御友^ニ不^レヌ候^ハ程^{ナラ}は

(善惡、御世路の御友に召し具せられ候はぬ(不)程ならば)

日大本

是非、御供に具せらるまじくは、

m 妙本寺

五郎承^レて之を打咲ツ、候^ニへとも恐に覚^ニ、佐計の大將軍の仰^セせとも不^レヌ候^ハ者哉、不^三リシ閑^ニマリ候^ハは是程^ニに古^{ナリ}なりとも

(183)

(五郎之を承て打咲ひつつ、「恐れに覚え候へども、佐計^{さばかり}りの大將軍の仰せとも候は^ぬ不^{かな}者哉。是程^{しつ}に閑まり候は^さ不^{いしへ}りし古なりとも)

日大本

「恐れに覚え候ふものかな。さばかりの大將軍の仰せとも覚え候はず。これほどに鎮まらざりし古なりとも」

(326)

n 妙本寺 今は切^レ足手^二を被^レ召^レ首^一を候^{とて}モ全不^レ可^二恨進^一候^{なり}

(184)

(今は足手を切り首を召され候ふとても全く恨み進^{まのり}す可^べから不候ふなり。)

日大本 今、足手を切られ、首を千段に召され候ふとも、まったく恨み奉るべからず。

(329)

mの例は、先に見たjの例とよく似ている。この場合も妙本寺本ではjと同じく「候+ず」となっている。この中ではnだけが「ず+候」となっているが、これは「不可(べからず)」との関係であろう。日大本では「候+ず」であったものが「候」を省略している。「候文」への過程であるのか、「候」の後に打消の助動詞「ず」が下接するのを嫌い、「候」を省略したものと思われる。文意においては「候」よりも打消の方が重要である。

おわりに

妙本寺本においても助動詞「可(べし)」や「不(ず)」に下接する「候」の用法(「べく候」「ず候」といった例も見られる。日大本ではさらに妙本寺本で「べし」や「ず」が「候」に下接している(「候べし」「候はず」)箇所が「べく候」「ず候」になっっている箇所が見られた。

「候」は中世末期には話しことばから書きことばになっていたようである。ロドリゲスの『日本大文典』には、次のように記されている。

Osorai (候^ひ)、又は、Soro (そろ)、Soro (候) は、或場合には書きことばの助辞であり、或場合には存在動詞であるが、何れの場合にも時と法によって活用し、他の動詞とは違った特殊な活用を持つてゐる。

Osoro (そろ) は、普通の書状に使つて、莊重なものには余り用ゐない。又、書きことばの舞^舞 (Mai) 及び物語^{物語} (Monogatari) に使ひ、話しことばでも亦一部の老人が尊敬する人と話したり、その人への伝言を言い渡したりする時の莊重な言葉にこれを用ゐる。

この記述によると、「候」は書きことばでは候文で使用され、話しことばでは老人が用いる丁寧表現であった。そし

て話しことばでは丁寧の補助動詞は「候」から「いざる」や「いざります」へ移行していった。

「候」の承接順序の異同が本門寺本によるのか、訓読本において生じたのかを確かめるためには、本門寺本を見てみる必要がある。本門寺本の書写が天文二十三（一五五四）年であり、その頃には「候」はかなり書きことば化し、「候文」化の途上にあつたであろう。また曾我物語の訓読文化がいつ頃から起こつてきたのかわからないが、訓読本の中でも成立の古い日大本は奥書がないので正式な成立時期は不明とはいえ江戸時代極初期か室町時代末期と目されている。正しくロドリゲスの時代である。承接順序の異同は、真名本（擬漢文）を、「候文」へ移行途上にあつた漢字片仮名交じり文へと書き改めた、表記スタイルを変更したことによるところが大きいと思われる。すなわち、単なる表記スタイルの変更によるものではなく、そこには時代的な要素が大きく関与しているのである。

注

二〇一〇年に告示された常用漢字表において、曾が常用漢字として認められたので、本稿では曾我物語を曾我物語と表記した。書名においても同様の処置を施した。

- 1 新日本古典文学全集『曾我物語』（梶原正昭他校注 二〇〇二年 小学館）388頁。なお、小井土守敏氏は真名本訓読本とする（「真名本訓読本系統『曾我物語』本文考」『国語と国文学』二〇〇二年十月号など）。
- 2 角川源義『妙本寺本曾我物語』（一九六九年 角川書店）や村上学『曾我物語の基礎的研究』（一九八四年 風間書房）60頁。
- 3 注1の新日本古典文学全集本『曾我物語』388～397頁。
- 4 日本古典文学大系『曾我物語』（市古貞次・大島建彦校注 一九六六年 岩波書店）8頁。
- 5 山岸徳平「仇討文学としての曾我物語」（『日本文学聯講』第二期 中興館 一九二七年）後、著作集IV『歴史戦記物語研究』（一九七三年 有精堂）所収。
- 6 注2の村上学著60頁。

- 7 注1の新日本古典文学全集『曾我物語』391頁。
- 8 注2の村上学著51頁。
- 9 注2の村上学著52頁
- 10 引用にあたっては妙本寺本は注2の角川源義著を利用した。用例アからの日大本の引用は注1の新日本古典文学全集『曾我物語』によった。
- 11 注1の新日本古典文学全集『曾我物語』386頁。
- 12 矢田勉『国語文字・表記史の研究』（二〇一二年 汲古書院）第四編第三章「候文の特質Ⅰ——「候」の機能」（初出は「候文における『候』の機能」松村明先生喜寿記念会『国語研究』一九九三年 明治書院）
- 13 土井忠生訳注『日本大文典』213～214頁（一九五五年 三省堂）
- 14 注2の村上学著44頁。